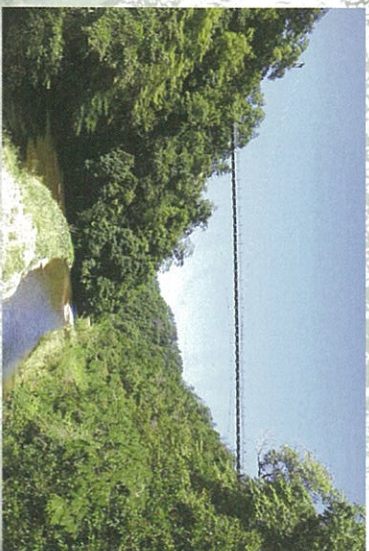


散策ガイドマップ

# 天下の奇震の舌

国の名勝・天然記念物



## 島根県奥出雲町



高さ45m、長さ160mの

## 「舌震の“恋”吊り橋」

大馬木川の深谷「鬼の舌震」には神話の昔、玉日女命という美しいお姫様が住んでおり、誰からも慕われていたことから、この辺りは「戀山」と呼ばれていました。その下流部に川面からの高さ45m、長さ160mの大吊り橋が完成しました。この橋の上から景色を楽しむとともに、神話の昔に想いをはせながら「幸せ」を「釣り(吊り)上げ」みませんか。

### 延長2Km、バリアフリー遊歩道

上流部の下高尾駐車場から中ほどの無料休憩所までの約1.2kmの遊歩道に加え、下流部の山手部分を通り、「恋”吊り橋までの約0.8kmの遊歩道が完成しました。下高尾入口から宇根入口までの全道がバリアフリー化され、眼下の深谷を見下ろしながら散策できます。車いすでも奇勝を見ることができるようになりました。



## 鬼の舌震

天平5年(733)に編さんされた『出雲国風土記』に「戀山(鬼の舌震の旧称)には、阿井の里に住んでいた玉日女を恋慕って夜な夜な日本海の和仁(ワニ・サメの古名)が、斐伊川を泳ぎ上ってきた。これを嫌った玉日女は巨岩で川をせき止め、ワニを阻んだ。このため、会うことができなくなったワニは、ますます玉日女を慕った」と記され、「ワニがしたうからこう呼ばれるようになった」とされています。また、ワニがその断崖絶壁と巨岩に驚き、舌を震わせたことから「ワニのしたぶるい」に転訛したともいわれています。

### 地質と成り立ち

「鬼の舌震」一帯の地質は、中国山地を形成する黒雲母花崗岩からなっています。花崗岩は表面が風化しやすいため、長い間の流水の浸食によって深いV字谷と、約2kmにもわたって蛇行する流れを作りました。両岸は断層が表面に露出し、岩石も長年の風化によって生じた板状・柱状等の規則正しい筋理と呼ばれる割れ目に沿って浸食が進み、垂直な断崖となって川に落ち込んでいます。谷底には巨岩が累々と堆積しており、川の浸食によってさまざまな形の巨岩、奇岩や、岩のくぼみに固い小石が入り、水の流れて回転して岩を削ることによってできる「瓢穴」と呼ばれる円筒形の穴も見られます。

昭和2年(1927)に国の名勝・天然記念物に指定されました。昭和39年(1964)には島根県立自然公園に指定され、同55年(1980)には中国自然歩道としても整備されました。

### 周辺の施設

#### 糸原記念館・糸原家 TEL0854-52-0151

鬼の舌震宇根入口から約4Kmのところにある糸原記念館は、元松江藩教師頭取・糸原家の歴史資料館です。奥出雲の杉木立と清冽なせせらぎに囲まれた土蔵造りの館内には、わたら製鉄の諸用具をはじめ家伝の美術工芸品・有形民俗資料等が展示されています。

また、隣接する糸原家の庭園と林間散策路「洗心乃路」も公開されています。鬼の舌震の無料休憩所(旧洗心亭)は、糸原家の元東屋を改装したもので、古くから糸原家を訪れた文人墨客が野掛け料理でもてなした建物です。



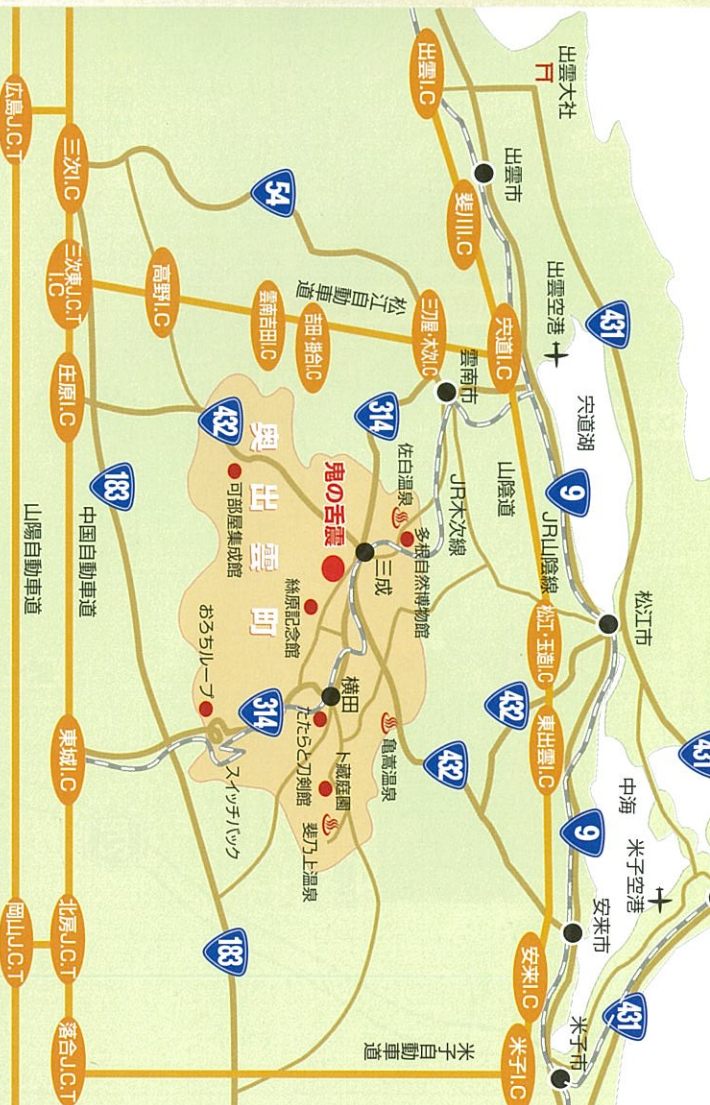
#### 下高尾入口の高台には、グラウンドゴルフ場グー

ンヒルゼとウ(TEL0854-54-0123)があり、家族連れや団体で気軽にグラウンドゴルフが楽しめます。隣接地には高尾ふれあい牧場(TEL090-3378-4613)もあり、ポニーの「奥之介君」「幸太郎君」とのふれあいが楽しめます。駐車場から0.5Kmの県道25号線沿いには、食味日本一に輝くブランド米を生産する奥出雲仁多米(TEL0854-54-2248)のカントリーエレベーターがあり、おいしい

#### 仁多米を出荷しています。

宇根入口側には茶店舌震亭(TEL0854-54-1114)があり、舌震の生き字引といわれるべき店主・山田文子さんが丹精した「舌震そば」は絶品です。宇根入口から県道25号線を約2.2Km下ったT字路右手には、奥出雲の十割そばを出す鬼そば(TEL0854-54-2101)もあります。

## アクセス図



### お問い合わせ先

## 奥出雲観光文化協会

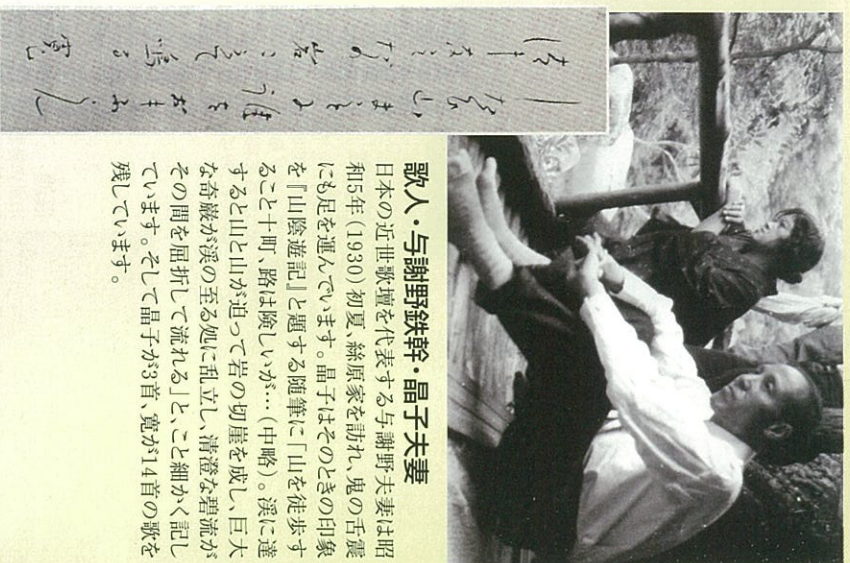
島根県仁多郡奥出雲町三成358-1  
TEL 0854-54-2260 FAX 0854-54-1229  
http://www.okizumogokochi.jp/

## 鬼の舌震を訪れた文人たち

鬼の舌震には奇勝、深谷美を求めて多くの文人墨客が訪れています。近頃の豪農、鉄師であった糸原家を訪れた文人達は、同家が所有する東屋(現在の無料休憩所)に案内されて野掛け料理を供されるのが習わしでした。そして、興にのつた文人達は鬼の舌震の印象を数々の作品に残しました。

紫の木のつとよは目におかす  
並ぶる岩のくだはつること  
晶子

したい山まことに誰とたふらん  
清き涙の岩こえて鳴る  
寛



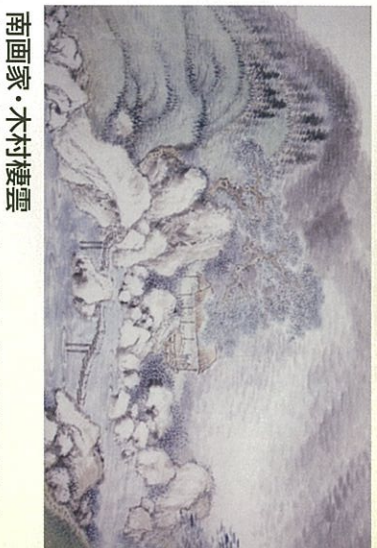
**歌人・与謝野鉄幹・晶子夫妻**  
日本の近世歌壇を代表する与謝野夫妻は昭和5年(1930)初夏、糸原家を訪れ、鬼の舌震にも足を運んでいます。晶子はそのときの印象を『山陰遊記』と題する随筆に「山を徒歩すること十町、路は険しいが…(中略)。溪に達すると山と山が迫って岩の切崖を成し、巨大な奇巖が深の至る処に乱立し、清澄な碧流がその間を屈折して流れる」と、こと細かく記述しています。そして晶子が3首、寛が14首の歌を残しています。

【資料提供・(公財) 糸原記念館】



### 南画家・田能村直入

明治時代を代表する南画家・直入は、明治11年(1878)と同12年(1879)に糸原家を訪れ、その印象を『鬼翁神題』と題した画巻に残しています。



### 南画家・木村樓雲

島根県安来市出身で、東京で昭和初期に活躍した樓雲は、昭和8年(1933)に糸原家を訪れた際、鬼の舌震を訪ね、その印象を「天下無比」と表現し、真景を卷子に描き残しています。

### 歌人・林霞舟

松江市在住の昭和の歌人・林霞舟は医師のかたから歌集「湖笛」を創刊し、短歌論「主客一体説」を提唱するなど短歌界に大きな影響を与えました。舌震亭手前に歌碑が建立されています。